

# 田舎がえり

林芙美子

青空文庫



東京駅のホームは学生たちでいっぱいだった。わたしの三等寝台も上は全部学生で女と云えば、わたしと並んだ寝台に娘さんが一人だった。トランクに凭もたれて泣いているような鼻のすすりかたをしている。わたしは疲れていたので、枕もとのカーテンを引いてすぐ横になったが、眼をつぶらないうちに頭のところのカーテンが開いてしまって、三階の寝台で新聞を拡げている音がしている。三階から下まで通しになった一つのカーテンなので、一人が眠くなつて灯をさえぎりたくても、上の方で眠くない人がカーテンを開けると、寝た顔は何時いつまでも廊下の灯の方へ晒さらしていなければならぬ。仕方がないので、ハンカチを顔へあてて眠ったが、

なかなか寝つかれなかった。阿部ツヤコさんの三等寝台の随筆を  
読むと、近所同士がすぐ仲よくなれて愉たのしそうだったけれども、  
わたしの三等寝台はとっつきばのない近所同士だった。熱海あたまあた  
りで眼が覚めると、前の娘さんは帯をといて寝巻きに着替とえる処  
だった。羽織と着物を袖そでだたみにして風呂敷に包むと、少時わた  
しの寝姿を見ていて横になった。

(どの辺かしら) わたしはひとりごとを云ってちよつと起きあが  
つてみたが、娘さんは黙ったまま湿ったようなハンカチを顔へあ  
てて鼻をすすっている。二階の寝台からは繩のようになったサス  
ペンダーと、大きな手がぶらさがっている。気になってなかなか  
寝つかれなかった。ポーランドの三等列車にどこか似ている。――

―朝眼が覚めたのは大垣おおがきあたりだった。娘さんは床の上へハンカチを落してよく眠っていた。昨日は灯火あかりが暗くてよく分らなかつたけれども、本当に泣いたのだろう、まぶた瞼が紅くあかふくらんでいた。顔を洗いに行つて帰つて来ると、娘さんは起きて着物を着替えていたが、わたしの上の寝台からは、まだサスペンダーがぶらさがつている。娘さんと眼が合つても娘さんはにこりもしない。よつぽど考えることがあつたのだろう。小さい鏡を出して髪かたちととのを調えると、また昨夜のようにトランクに肘ひじをついて鼻をすすつていた。

\*

わたしは京都へ降りた。二等車からも、外国人が四、五人降りて来ていた。わたしは赤帽がみつからなかったので、ホームへ降りしたトランクをさげて歩み出すと、「ヴアラ」と云って、わたしの小さい蝙蝠傘<sup>こつもりがさ</sup>を背の低い男の外国人がひろってくれた。

「メエルスイ・ビヤン！」<sup>こた</sup>そう応えて、わたしは思わず顔の赧<sup>あか</sup>くなるような気持ちを感じてたじたじとなつてしまった。巴里<sup>パリ</sup>にいたとき、何度かこんな片言<sup>かたこと</sup>を云つていたが、京都でこんな言葉を使うとはおもいもよらないことだ。関西に住み馴れた仏蘭西人<sup>フランス</sup>なのだろう。橋を渡つてさつさと改札口へ行つた。同じ席にいた鼻をすする娘さんも京都で降りてわたしの横を改札口の方へ歩い

て行っている。

朝なので、駅の前はしつとりしていて気持ちが悪かった。ホテルの旗をたてた人力車が何台もならんでいたりする。東京駅には人力車なんてなかったが、京都は人力車が随分多い処だ。——縄な手の西竹と云う小宿へ行った。小ぢんまりとした日本宿だと人わにきいていたので、どんな処かと考えていたが、数寄屋造りすきやとでも云うのだろう、古くて落ちついた宿だった。前が阿波屋と云う下駄屋で、狭い往おうらい来はコンクリートの固い道だった。荷車に花を積んだ花売りが通る。赤い鉢巻きをした黒い牛が通る。朝の往来はさすががしかつた。わたしの部屋は朝だと云うのに暗くて、天井の低い部屋だった。裏は四条の電車の駅とかで、拡声機の声が

ひっきりなしに聴きこえて来る。わたしは小さい机に凭よれて宿帳やどちようを書き、障子しょうじを開けてみたり、鏡台の前に坐つてみたりした。明日の講演さえなければ奈良の方へでも行つてみたいなどおもつた。

障子を開けると、屋根の上に細い台がこしらえてあつて、幾鉢か植木鉢が置いてある。白い花を持った躑躅つつじや、紅い桃、ぎんなんの木、紅葉、苔こけの厚く敷いた植木鉢が薄陽うすびをあびて青々としていた。庭が狭いので、屋根の上に植木を置いて愉しむ気持ちを感じた。如何いかにも京都の宿屋らしいと、わたしは、屋根にある桃の鉢を両手にかかえて机へ置いて眺めた。いい苔の色をしていて、素焼すやきだけれど、鉢は備前焼のような土色をしていた。



\*

早いめに昼食を済ませて、わたしは山科<sup>やましな</sup>の方へ行つてみた。十年位前だったかに、大津から疏水<sup>そすい</sup>下りをしたことがあったが、その折に見た山科の青葉は心に浸<sup>し</sup>みて忘れられなかつたので、わたしはあの辺をぶらぶら歩いてみたいとおもつた。円タクをひろつてどこでもいい景色のいい疏水のほとりに降ろして下さいと云うと、都ホテルの下の道を自動車はゆるく登つて行つた。都ホテルの堤には、つぼみを持った躑躅<sup>けあげ</sup>の木が堤いっぱい繁つていた。自動車の運転手が、これが蹴<sup>けあげ</sup>上の躑躅だと教えてくれた。

疏水のほとりで降りて、それから橋を渡り、流れに添つてぼく

ぽく歩いてみた。何と云う町なのか知らないけれども、郊外らしくひら展きんけていて、新らしい木口きんぐちの家が沢山建つていた。それでも、時々、廃寺のような寺があつたり、畑や空地あきちなどがあつた。寺の門を配した豪ごう奢しやな別荘もある。廃寺の庭は広々とした芝生しばふで、少年が一人寝転んで呆ぼんやり空を見ていた。白い雲が、疏水の水に影をおとして流れている。いい天気だった。堤の下の赤松越しに、四条行きの電車が走っている。電車道の人家の庭には白い卵うの花はながしだれて咲いている。磚せん茶ちやの味のような風が吹く。ごろりと横になりたいような景色だった。蹲しゃ踞がんで水みの面もをみていると、飛んでゆく鳥の影が、まるでかますかなんかが泳いでいるように見える。水色をした小さい蟹かにが、石崖いしがけの間を、螯はさみをふりながら

登つて来ている。虹あぶのような羽虫はむしも飛んでいる。河上では釣つりをし  
ている人もいる。何が釣れるのか知らない。底まで澄んでみえる  
ような水の青さだった。時々、客を乗せた屋形船やかたぶねが下りて来る。  
大津へ帰る船は、船頭が綱を引っぱって、なぎさを船を引いて登  
つて来ている。船は屠殺場行きの牛のようにゆるく河上へ登つて  
いる。水のほとりの桜はまだ咲いていた。青葉の間に散りぎわの  
悪い色褪いろあせた花をのこして、なぎの日のような煙った淡さで咲い  
ていた。

堤を降りて、道を探しながら電車道の方へ行くと、洋服を着た  
子供たちが、京言葉で泥あそびをしていた。

電車の駅近くへ出ると、小料理屋の間に挟はさまって、大石内蔵くら之

助<sup>すけ</sup>の住んでいたと云う、写真や高札<sup>こうさつ</sup>を立てた家があった。黄<sup>たそが</sup>昏<sup>れ</sup>ちかくて、くたびれきつていたが私は這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>つてみた。家の中は暗くていい気持ちではなかった。入口から等身大の義士人形がずらりと並んでいた。打ち入りに使った色々なものがてすりの向うに飾つてあつたが、暗くて詳しく眼に写つて来なかつた。小砂利が家じゆう敷きつめてあつて、地獄極楽を觀<sup>あ</sup>に來たような感じだつた。義士人形は古いせいか、顔の色が褪<sup>あ</sup>せて、指がかけたり、鼻がこぼれていたりして、気味の悪い姿だつた。

\*

電車で宿へ帰ると、また風呂へ這入り、わたしは机の前に坐つてみたが、何となく落ちつかないで困ってしまった。明日の十二日は啄木たくぼくの記念日だと云うのだけれども、啄木が生れた日なのか亡くなった日なのか、それさえわたしは知らない。読むにはどんな歌がいいだろうと、わたしはトランクから啄木歌集を出してあつちこつちめくつてみた。

ももとしせ  
百年の長き眠りの覚めしごと

あくび  
呻してまし

思ふことなしに

## 山の子の

山を思ふがごとくにも

かなしき時は君をおもへり

こんな歌が眼にはいった。辛つらくなるような気持ちだつた。一条大宮と云う処はどんな処なのだろう。羅らしやうもん生門と云う芝居を見ると、頭に花を戴いた大原女おはらめが、わたしは一条大宮から八瀬やせへ帰るものでござりますると云う処があつたが、遠い昔、一条大宮と云う処はわたしになつかしい人の住んでいた町の名であつた。懶ものういので横になつて啄木を読む。

空知川雪に埋れてそちがわ うも

鳥も見えず

岸辺の林に人ひとりゐき

むかし空知の滝川と云う町にわたしも泊ったことがある。旅空でこんな歌を読んでいると、夙とつから旅にいるような気持ちだ。

十二日は朝から雨だった。紫竹桃しちくももの本町もとちようのお波さんへ電

話をかける。正月大阪へ来た折に文楽の人形を頼んでおいたのが出来たかどうか。首がまだついていないけれども、衣装が美しいから早く見せたいと云う返事だった。「そんなら、神戸の帰りに寄りますけど、それまでには出来てる？」と訊きくと、あんじよう

出来てますと云う返事なので、わたしはすぐ雨の中を神戸へ行き、  
くぼかわつるじろう  
窪川鶴次郎氏、  
わたなべしゅんぞう  
渡辺順三氏たちと逢い、啄木の講演を済ま  
せて神戸の諏訪山の宿へ二泊して、十四日に尾道おのみちへ発たつて行つ  
た。ふと、海がみたくなつたからだ。汽車が駅々へ着くたび昔聞  
き馴れた田舎言葉いななかがなつかしく耳に響いて来る。わたしはさまざま  
まな記憶で落ちついていられなかつた。歓びよろこびで、胸がはずんでい  
た。幼い日の女友達に逢いたいとおもつた。もう女学校を卒業し  
て十年以上になるのだから、その人たちはみんな奥さんになって、  
子供があるに違いない。

\*



尾道の駅には昼すぎて着いた。新らしい果物屋、新らしい自動車屋、新らしいさんばし棧橋、何か昔と違つた新鮮な町に變つていた。

道も立派になり女車掌の乗っている銀色のバスが通つているけれども、いまだに昔と變らないのは、町じゆうがさかなくさ魚臭いことだ。その匂いにおを嗅ぐと母親を連れて来てやればよかつたとおもつた。

だが、あんまり町が立派になつていたので、歎びがすぐ失望にかわつて行つてしまう。町では文房具屋にかたづいている友達を尋ねてみた。もう四人もの子もちだった。

「まア！ 誰かとおもえば、あんたですかの、どうしなさつたんなア、こんなにとつぜんで、ほんまに、びっくりしやんすがのう喃」

そう云つて、その友達は、白粉おしろいの濃い綺麗な顔で、店の暗い梯子段はしごだんを降りて来た。——わたしは海添いの旅館に宿をとつた。障子を開けると、てすりの下が海で、四国航路の船が時々汽笛を鳴らして通っている。向島のドックには色々な船が修理に這入っていた。鉄板を叩く音たたが、こだまして響いて来る。なごやかに景色に融けた気持ちであつた。ひそかな音をたてて石崖に当る波の音もなつかしかつた。てすりに凭れて海を見ていると、十年もの歳月が一瞬のように思えて仕方がない。この宿屋に泊るのに、金は大丈夫だったかしらと、何の錯覚からかそんな事まで考えたりした。

昔、わたしはこの町で随分貧しい暮らしをしていた。さまざま

なものが生々と浮んで来る。その当時の苦痛がかえってはつきり心に写つて来る。休止状態にあつたみじめな生活が、海の上に浮んで来る。わたしは昔のおもい出で、窒息しそうに愉たのしかった。その愉しきは狂人みだいたつた。Y襯衣シヤツの胸の釦ボタンをみんなはずして、大きな息をしたいほどな狂人じみた悲しさだつた。明日は因いんの島しまへ行つてみようと思つたりした。

風呂から上ると、わたしは廊下を通る女中を呼びとめて、上等の蒲団ふとんへ寝かせて下さいと頼んだ。なりあがりものの素質をまるだしにしてしまつて、だが、その気持ちは子供のような歓びなのだ。わたしは海ばかり見ていた。ちぬご、かわはぎ、かながしら、色々な魚が宙に浮んで来る。

夜になると宿屋の上をほととぎすが鳴いて通った。この町では晩春頃からほととぎすが鳴きに來た。学校の国文の教師や、女友達が遊びに來てくれた。子供を寝かしつけていて遅くなったと云う友達もあつた。

\*

翌日は早く起きて因の島行きの船へ乗つた。風は寒かつたがい天気だつた。船が町に添つて進んでゆくので、わたしは甲板に出た町を見上げた。わたしの住んでいた二階が見える。円福寺と云う家具屋の看板が出ていた。わたしは亡くなった義父の棺かん桶おけ

を見ているような気持ちだった。千光寺山には紅白のくじらまく鯨幕が  
ちらほら見えた。因の島の三ツ庄へ行くのを西行きとまちがえて  
たくまと云う土地へ上った。船着場の酒屋で、歩いてどの位でし  
ようと訊くと、一里はあるだろうと云う返事なので、荷物が大変  
だと、船をしたてて貰って三ツ庄へ行つた。小さい和舟の胴中に、  
モオタアをつけた木の葉のような船で、走り出すと、ほお頬がぶるぶ  
るゆすぶれる。はぶの造船所の前を船が通っている。社宅が海へ  
向つて並んでいる。初めて嫁入りをして行つた家が見える。もう、  
あの男には子供が沢山出来ているのだらうと、ひらひらした赤い  
ものを眼にとめて、わたしはそんなことを考えていた。

造船所の岬のみさき陰には、あさなぎ、ゆうなぎと書いた二そうの銀

灰色の軍艦が修理に這入っていた。白い仕事服の水兵たちがせつせと船を洗っている。赤い筋のある帽子が遠くから螢ほたるのように見えた。三ツ庄へ着いて親類の家へ行くと、子供も誰もいなくて、若夫婦が台所の土間で散髪をしていた。小さい犬がわたしの膝ひざへ飛びあがって来た。髪を刈りかけて、若夫婦は吃驚びっくりして走って来た。

「とつぜんぞやがのう、どうしたんなア、わしや、誰かおもうて吃驚のうしたが喃」

尾道でも同じようなことを言われたと云つて、わたしは、犬と一緒に庭の中をあつちこつち歩いてみた。

「そりやアア、よう来てつかアさつた。えつとア御馳走しや

すんで、ゆつくりしとつてつかさい喃」

若い主婦は何からしいいかと云う風に、立ったり坐ったりしている。いかなご、まて貝、がどう、そんなものを煮て貰つてたべた。田舎の味がして舌に浸しみた。遠くの荒物屋へ風呂を貰いに行つて、子供たちとかえりに海へ行つてみた。あんまり森しんとした海なので、まるで畳のようだと云うと、子供がこんな黄たそがれ昏を鯛なぎと云うのだと教えてくれた。鯛が入江へ這入つて来る頃は、海が森となぎて来るのだと云つていた。小波さざなみの上を吹く風の音さえ聞きこえそうに静かな海だった。夜になると、この辺の船は、洋灯をつけていたが、いまもそうなのだろうか。——島へ来て島の人たちの生活を見ると、都会の生活とは何のかわりもない

のだ。漁師は漁をし、子供は学校へ行き、百姓は土地をたがやすのに忙<sup>せ</sup>わしいし、造船所の職工は職工で朝から夜まで工場だし、一軒しかない芝居小屋も幾月となく休みだと云うことだ。学校歸りの子供がつくしを沢山とつて歸っている。何時<sup>いつ</sup>の日か金の値うちがなくなり、田舎をたよりにしないと誰が云えよう。そう云う暮らしに早く歸つて来たいとおもつた。自分で食べるものをつくつて暮らすのは愉しいことだろうとおもつた。地酒をよばれ一泊して尾道へ歸つた。

\*



学校の図書館の裏の秋の草

黄なる花咲きし

今も名知らず

尾道では女学校の庭へも私は行つてみた。女学校には図書館はないけれど、講堂の裏に、小さい花畑があり猫塚があつたりした。そこには小さい花が沢山咲いていた。新らしく出来た運動場には桜の並木にかこまれて、生徒たちがバスケット・ボールをして遊んでいた。

帰りは神戸へも大阪へも寄らず京都へ降りて西竹へ行つた。人形が出来て来ていた。幾月か空想していた人形を前にすると、あ

んまり立派なので（これは大変だな）と思った。

持つて来たお波さんは、一人ではこわれてしまうから、わたしも東京へお供しましょうと云つてくれた。人形はびんつけで髪を結ゆつていた。半襟はんえりに梅の模様があるのは、野崎村の久松ひさまつの家に梅の木のあるのをたよりにしたのだからと云うことだった。手は踊りのように自由に動く。まだ娘だから喜怒哀楽がないのだと云つて、お染そめの人形は、まなじりをすずやかにあけて、表情のない顔をしていた。あんまり人形が美しいので、成瀬なるせむきよく無極氏や山田一夫氏にも宿へ来て貰つて観て貰つた。雨が降つていた。肩さきがぬれるほどな細かな雨だった

三人分の三等寝台を買いに行つて貰つたが、一つも買えなかつ

たので、わたしたちは空すいていそうな遅い汽車に乗った。坐すった  
なりで身動きも出来ないほどのこみかただったが、途中名古屋あ  
たりで一番上の寝台が空あいているのをボーイが知らせて来たので  
その寝台に人形を寝かせて帰った。人形の寝ている寝台の下は五  
ツともみんな男のひとばかり横になっていた。



# 青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

2003（平成15）年3月5日第2刷発行

入力：林 幸雄

校正：noriko saito

2004年8月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 田舎がえり

林芙美子

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>